

Eureka VII

六年制通信 No.16 令和2年9月11日(金)号

フォールスメモリー

推理小説を読んでいると、途中までこいつが犯人に違いないと確信しながら読み進めていると最後に意外な展開があって、まさかと思われる人物が犯人だったということがよくあります。サスペンス映画でもそうですね。最後まで一緒に犯人を追っていた人物が実は犯人だった、とか。こちらは映像を駆使しているだけに騙されやすい。作り手は読者や視聴者を誤った方向へ導く伏線をあちこちに張り巡らせておくわけですが、これをミスリードと言います。もっとも、最近のテレビでは配役を見た時点で犯人の目星がついてしまうこともあるのですが…。さらに、読み慣れてくると、作者の伏線の上手下手が気になって作品自体を楽しめなくなるので注意が必要です。

マジックにも似たことがあります。例えば一枚のカードを選ぶときに、本当はマジシャンがコントロールしているのですが、お客さんが自分で選んだと思わせるテクニックで、これをミスディレクションと言います。私はマジックが好きでよく観るのですが、タネを探そうとはしません。ただひたすら驚いて観ています。時に絶対あり得ないマジックに出会うと、魔法だと思うようにしています。リチャード・ターナーでしたっけ、盲目のマジシャン。あの人は魔法使いです。間違いないです。

ミスリードもミスディレクションも、間違った情報を「正しいと思い込ませる」テクニックですが、これが私たちの記憶にも起こるというのです。経験していないはずの記憶を頭の中で構築してしまったり、再構成したり、よく記憶を上書きするというでしょう、あれですね。特に、誘導的質問をされると記憶がどんどん修正されていき、不確かだったはずの、あるいは誤った記憶も確実な記憶と認識されるらしい。アメリカの心理学者で、この人は女性ですが、ロフタス博士は虚偽記憶（フォールスメモリー False Memory）と呼んでいます。あやふやな目撃証言が誘導尋問で「確かな記憶」と修正され、それが唯一の証拠となって有罪判決を受けた受刑者たちの弁護もしたようです。それで、実に多くの虚偽記憶があることを知るのです。

彼女の関心は人はなぜ「忘れる」のか、ではなくて、人はどのように「記憶する」のかというもので、いくつか面白い実験をしています。Smashed vs Hitの実験。まず被験者たちに自動車事故の映像を見せます。その直後に二つのグループに分けて質問をします。一つのグループには「さきほど激突(smashed)した車は時速何キロくらい出ていたと思いましたか」、もう一つには「さきほどぶつかった(hit)車は時速何キロくらい出ていたと思いましたか」という質問をします。「激突した」と「ぶつかった」だけが表現の違いで、同じ映像を見ている人たちですが、「激突した」と聞

かれた方がスピードを出していたと答えています。さらに実験は続きます。この一週間後、被験者たちに「あの映像で、ガラスが割れているシーンを見ましたか」と聞いたのです。そんな映像はありません。ですから、ガラスの割れる映像を記憶している人はゼロのはずです。しかし一週間前に「激突した」と聞かれた方の何と 30%の人が割れたガラスを見たと言ったのです。ないはずのシーンを頭の中で作ってしまったのですね。こわっ。

リビング vs 研究室の実験もあります。被験者には色んなものが雑然と置かれた部屋に入ってもらい、あとで二つのグループに分け、一つには「さっきのリビングにあった物を思い出してください」と聞くと、「テレビ、ソファ…」とリビングに普通にあるものを挙げました。もう一つのグループに「さっきの研究室にあった物を思い出してください」と聞いたところ、「パソコン、書類…」と答えたというのです。相手の質問に誘導され、思い出す内容が構成される例です。記憶を思い起こすことを想起というのですが、集団で会話をしながら想起をすると、つい他人の記憶に引きずられて虚偽記憶が生まれやすいということです。やっかいなのは、初めはあやふやだった記憶がはっきりしたと感じてしまっ、それが虚偽記憶であるにもかかわらず、正しい記憶として自分で上書きしてしまうことです。「激突」と「ぶつかった」のように言葉の印象が自分の記憶にまで影響することを、私たちはもうすでに、そうとは知らず体験しているのかもしれないですね。気をつけたいものです。

今週のおすすめ

- ・ 谷崎潤一郎 『懶惰（らんだ）の説』（岩波文庫『谷崎潤一郎随筆集』より）

『春琴抄』や『細雪』の著者は明治 19 年の生まれ。夏目漱石のおよそ 20 歳下、芥川龍之介の 6 歳年長。この人はあまりの神童ぶりに、校長から飛び級の試験を受けるように言われ、合格しています。森鷗外みたいですね。『懶惰の説』は昭和 5 年に発表された随筆です。文庫で 20 ページ足らずの小品です。いつも思うのですが、戦前の人たちはこういう文章を読んで楽しめたのに、今の私たちには非常に難しく感じるわけで、ということは昔の教育の方が圧倒的にレベルが高かったに違いない、そう思えてならないのです。悲しい。失ったものは大きいですね。

「懶惰」とは怠けること。谷崎は「ものぐさ」や「億劫がり」は東洋人の特色だとし、歯並びやテーブルマナー、そして食事などを西洋と比較しつつ、東洋的懶惰を擁護しています。あるいは、玄德と孔明の「三顧の礼」を挙げ、もしそれでも孔明が世に出ず隠遁生活のまま終わったとしても、その心持に同情できると。私もそう思います。このあたり、西洋人には謎なんでしょうね。

もちろん、谷崎自身は怠け者ではありません。このエッセイの最後に自分でもそう言っていますが、だいたい怠けものには書ける文章ではありません。

ちなみに、この随筆集には谷崎の最も有名な随筆である『陰翳礼賛』も入っています。図書館に入れておきますから、トライしてごらん。

BGM は SEKAI NO OWARI の *Umbrella* でした…。